「研究」佐伯荘（その五）

本荘百二十町ノうち　赤木・仁田原・横川

宮下良明
（会員・佐伯市古江）

番匠川流域を上岡十三重塔を右に見て弥生町を遡り、白山権現社を仰ぎ見ながら本匠村に入ると、笠掛地区から左に大きくカーブする支流を「クルス」川と呼ぶ。クルスとは切支丹を連想する呼び名である。直川村の内赤木・仁田原・横川の山々を源流として、川幅も広く流れも緩やかで水は清い。この地域に中世荘園の景観が展（ひらけ）る。その中心地を「神ノ原（ゴウハル）」というが、古来は「郷ノ原（ゴウ）」ではなかったろうか。弘安図田帳（一二八五）が示す佐伯本荘百二十町の内に所属する穀倉地帯である。

中世の昔この地域（郷）の開発者はいかなる人物かは確認できないが、図田帳では佐伯弥四郎政直法名道精がこの頃の地頭職に補任（ブニン）されている。しかし、政直以前に各名主（ミョウズ）達によって開発されたことには間違いない。佐伯氏系図では政直を第五代惟直としているが、異論がないわけではない。佐伯荘地頭職に補任されたがため、佐伯姓を名乗ったのであって、佐伯弥四郎までは仮名（ケミョウ）で、例えば北条政直とか、平ノ政直とかの本貫名があるはずである。

推論を進める。赤木一帯は中世仏教文化の栄えた佐伯荘の一地方でもある。その遺産である笠塔婆。層塔・宝篋院塔・五輪塔・宝塔等の石造物金石文で、往時の民衆が生きた様子を伺い知ることができる。また、その古塔群の周辺には、必ず在地支配者の拠点や屋敷があったと荘園学者は述べている。

栗林正明寺跡層塔

塔身月輪内に薬師如来の種字（佛を表わす梵字）バイを薬研彫りにし、下部の両脇に日光・月光の両菩薩名を線彫りにした三尊様式と、後方（西）はキリーク（阿弥

五輪塔（栗林正明寺跡）

梵字バイ（写真矢印）

如来）の種字で西方浄土を現わすから、正当方位に置かれていることになる。相輪は格狭間（コウザマ）と反花の上に置かれて美術的である。塔身の銘文に異体字が見える。（拓本で確認）

吹原地蔵院古塔群

多層宝篋院塔と一般的にいわれている珍しい塔がある。方向は正当方位ではないが塔身四面月輪内の梵字は、阿弥陀三尊の種子（シュジ）と梵字オンと思われるが定かでない。相輪を欠き代わりに五輪塔の風空輪と思われるものを乗せている。原形のままだとすれば貴重な塔と思われる。銘文に永享十二年（一四四〇）が見える。

宝篋印塔（吹原地蔵院）

梵字オン？（写真矢印）

層塔

現在四重層塔であるが、本来四重はないと専門家はいう。とすれば一重が欠落していることになる。月輪内の梵字は、隣接の宝篋院塔と同様と思われる。室町前期頃の様式。

宝篋院塔（残欠）

他所より移されたもののようである。角飾（スミカザリ）の様式は室町中期以前と思われる。残欠の部分が見つかれば佐伯地域一番の規模であろう。以上の中世石造物はこの地域の一部にしか過ぎない。昔から仏教文化の盛行を物語るものであろう。

五輪塔（左）と六地蔵塔（右）（吹原）

中世ノ道

堅田村大越―赤木―横川―因尾と佐伯荘を結ぶ広域道

は、中世の昔荘園南西部の大動脈であった。その先きは三重郷・緒方郷に通じ距離も意外と近い。南は日向国臼杵荘と接する。その沿線に前掲の石塔類が散見される。

『一に市福所、二に仁田原、三に因尾の堂ノ間』という佐伯近郷に何時の頃か知る由もないが、「米」がうまいという伝説が流布している。だが近世以前の民衆は米を喰い分け、味に上下をつけることはできなかった。それどころではない。佐伯地方には古来『振り米』といって死の直前枕元で竹筒に入れた米を振り、その音を死に行く人に聞かせていた。という悲惨窮まりない話がある。以上から察しても米がうまい云々説は信用できない。実はこの三地帯には本来別の意味があって、時代と共に美味説に転化したものと考える。つまり佐伯荘が開発され行く様を、順次言葉で言い現わしたものと理解してよい。

持論であるが、まず本郷（上岡周辺）が初期に開発されて、堅田（市福所）―赤木（仁田原・横川）―因尾（堂ノ間）と開発経路を辿ったものと理解している。開発者の名前は見当らないが、赤木地区功休庵跡の宝篋院塔には、逆修妙景禅門正慶元年（一三三二）と北朝の金石文が陰刻されているから、鎌倉後期にはすでに開発されていた。なお妙景禅門なる人物は、「名」の支配者名主と推察する。（名主とは一定の地域の村落における農業経営の指導者で、年貢・公事等取りまとめ代表する百姓とある。）

南北朝時代と佐伯本荘

元弘三年南朝（一三三三）北条氏が滅亡し、南北朝動乱時代が始まった。この動乱は両朝廷の対立という政治上の争いだけではなく、その背景には、全国一円に皇室の領有する厖大な荘園の相続問題が絡んでいたという。この関係は先に史談一七〇号に皇室略系図を示して少し述べたが、今少々補足することにする。

御宇多法皇が京都大覚寺に住んだ関係から大覚寺統と呼び、一方、御深草上皇の系統が持明院に住したので持明院統と呼ぶ、前者は後の南朝、後者は北朝になった。従って、御宇多法皇から昭慶門院に伝領された戸穴庄―佐伯荘（移行名）は、南朝系になるという「佐伯氏一族の興亡」通りである。

しかし文献のみに頼るわけにはいかない。なぜなら私達が学んできた戦前の歴史と戦後の歴史を比較すると、その史実史観が極端なまでに、変わって編纂されている

ことに驚くからである。昭和二十年以前の国史には南北朝時代の文言はなく、吉野朝（南朝）時代を極端に強調し、楠木正成大忠臣足利尊氏反逆臣という、明治の学者が敷設した歴史路線を振り返ることなく走った結果が、敗戦に繋がって行った悲劇は記憶に新しい。

古典物平家物語・太平記に刺激されて思い立った徳川光圀が、一代を賭して編纂した大日本史を、日本の正史として取り入れた南朝正統論を、学んできた我々の歴史観に問題が残る。南北朝期の佐伯荘はどうであろうか。

角違一揆

貞和二年（北朝＝一三四六）足利尊氏が角違一揆中に恩賞として、佐伯荘地頭職を与えたとする「佐伯氏一族の興亡」に従って、論を進めることにする。

角違一揆とは建武三年（一三三六）尊氏が再び九州より攻め上るに当たって、結成された大友氏庶子家を中心とした団体と記す。南北朝時代に発生した弱小領主層によって、大一揆、小一揆が当時の日本全土に波及した（日本史）という。それは恩賞目当てに結成されたものだろう。豊後国が最も中心的恩賞地に指摘されたものであろう。角違一揆中とは武士的連合体を意味する多人数である。それに佐伯荘地頭職を与えたものだろうか。南北朝期の佐伯荘から、特定の人物を割り出すことは難しいが、まったく暗闇の中で分からないことではない。

上小倉磨崖宝塔

小倉という地名は全国に数多く所在し、その意味合いは、古代に求められる。弥生町上小倉もそうである。近くでは臼杵石仏群の山が小倉山で、その山上に日吉山王社が祭祀されている。なぜか上小倉と気脈を通じる。小倉山なる地名と社寺日吉山王社・比叡山延暦寺との関係は深い。ここで細微を論ずることはできないが、機会があれば論じてみたい。上小倉宝塔群の銘文については、専門家の解読がそれぞれの文献で示されている。

最近弥生町史が発行されたが、金石文解読はそちらの方が詳しい。この宝塔群は、鎌倉後期から南北朝期にかけて建立された。銘文に人物名が刻まれている。この人物達が当時佐伯荘の地頭・下司・公文・名主のいづれかの職にあったものと思われる。

銘文一

嘉暦元年（一三二六）三月十六日大願主大神惟武、嘉暦は南北朝以前の年号で時の豊後国守護職は、大友氏第

嘉暦元年の文字が残る銘文(矢印)
(上小倉)

六代貞宗である。佐伯氏系図上に惟武は見えない。しかし、鎌倉後期における佐伯荘の重要人物に変わりはない。

銘文二

嘉暦四年巳己八月六日、嘉暦四年は八月に改元して元徳元年となった。当時はまだ鎌倉幕府北条氏権勢の時代であった。したがって、この時期まで北条氏一円が佐伯荘の要職にあったものと考える。北条氏は桓武平氏を本姓とし、三ツ鱗を家紋としている。銘文には能海逆善也・西妙聖霊也とあり、西妙とは誰か今後の究明を待つ。

銘文三

嘉暦4年の文字が残る銘文(矢印)(上小倉)

康永四年乙酉(一三四五)二月廿四日供養願主惟覚敬白、康永四年は十月に改名して貞和元年となり北朝年号である。願主惟覚夫婦が宝塔を建立して、自ら主前供養をしたことから推量すれば、その時期に何等かの重大事態が発生したものと解する。即ち、足利尊氏が角違一揆に佐伯荘地頭職を与えた時代と合致する。尊氏方(北朝)に付いた大友氏は七代氏泰の頃であり、南北朝動乱の最只中で、佐伯荘地頭職も交替の激しさを知るこ

とができた。以上「佐伯氏一族の興亡」に従って考察した。

上小倉磨崖宝塔の銘文の人物を挙げて南北朝時代を眺め、佐伯本荘の支配者を研究してみた。弘安図田帳（一二八五）の頃より銘文一の嘉暦元年は四十年後、康永四年は六十年経過の宝塔建立となる。蒙古合戦以来鎮西（九州）の荘園地頭職は恩賞から没官（ボッカン）（官職を取り上げられること）されるなど、足利政権安定まで約百年の間、激しい領主層の交替劇史を見て来た。佐伯荘も例外ではなかったろう。公文・名主等の小領主がこの時代より台頭してくる。つまり佐伯氏族が、一枚岩的佐伯荘支配者ではなかったことを意味する。

康永４年の文字が残る銘文(矢印)(上小倉)

上小倉の磨崖塔が佐伯本荘に関係が深いことは前にも述べた。これだけの丸彫に近い仏塔を、空想や無知識で型刻することはできない。国東塔を祖型にしたとも思えぬ。原形はやはり上方方面に求めたものであろう。

弥生町及び直川村には、幾多の古塔・古社・古刹をみる。信仰によって現世の安穏を願い、信心によって村落の結束を誓い合ったものであろう。金石文に見る結衆・講中等の文字がそれを物語る。これらの文化遺産で、中世社会の常民生活を量（ハカ）り知ることができるのである。また、赤木・横川方面は家屋の新築を多く見るものの、倉・石垣・田畑等近郷を結ぶ道路等には、中世の景観が今なお、名残をとどめている。

上野村・下野村

上野村（弥生町）を中世に遡って荘園制を遠望してみると、番匠川の流域に水運を利用して集う工人・職人・僧や神人と、山野の産物を持込む狩猟民や木地師、坑山

師から修験者等の集会の場を想像すれば、中世の人達が築いた荘園の要(カナメ)として、上野村・下野村が佐伯本荘百二十町の中心的要に当たることに、大方の人達も納得するものと確信する。

また、直川村横川街道に榜示(ボウジ)を立て、佐伯領の境界を示す珍しい標柱は、例え近世らしき物でも中世荘域を受継いだが故の、村役人達によって作成されたものと考えてよい。記述中の拓本がそれである。

広い佐伯本荘の中(ウチ)、津久見・八戸・因尾・保戸島・大島・鶴見半島・丸市尾等荘園の境界には、まだまだ幾多の中世所産物が深い眠りの中にあるものと推察する。

荘園基本用語

割符(わりふ)＝中世の為替手形のこと、遠隔地へ米銭を送るのに現物の代わりに割符を送付し、当該地で米銭を受け取る。この為替を取り扱った業者を割符屋・替銭屋といった。

幅・奥行き23センチ　高250センチ（横　川）

目銭(もくせん)＝銭(ぜに)の異称である鳥目(ちょうもく)から転じた。領主が収納の際あらかじめ悪銭が混じっているときの目減りを計算して、余分に徴収した銭のこと。

切銭(きりぜに)＝鎌倉から室町にかけて、銅を盗むために銭貨など一部を切取ったその損傷銭。

馬足米(うまあしまい)＝荷物を積載した馬の数を基準に賦課した。荷物を船から駄馬に移し替える港・津などで徴収した。

井料(いりょう)＝荘園領主が井堰・溝・堀を開発維持し、使用者である農民からその使用料として米銭を徴収した。米銭を指す。

参考文献

講座日本荘園史
佐伯氏一族の興亡
大平記（よみ）の可能性
日本史研究